

「古代印度更紗」を巡って

前五回分が意外にも好評であったために、間を措かずに再びこの連載を続けることを最初に断っておかなければならない。今回は京都高等工芸学校初期に購入された「更紗」に光を充ててみよう。

「古代印度更紗(白[木綿]地に大柄草花紋散し)」(AN.31)と題する標本が残っている。旧京都高等工芸学校染色科の発意により1913年1月23日に受け入れたもので、

2点からなる。平井宇一郎より340円で購入したと標本原簿に記録されている。納入業者平井に就ては知る処は皆無であるが、当時平井より購入したものは頗る多い事は標本原簿が教える通りである。当時京都高等工芸学校校長中澤岩太の年俸の3000円に照らすと購入価格は異常に高いと言いうる。まさしく貴重品扱いであったと思われる。標本を仔細に点検すると、ペルシャ語と思われる文字が読め(図版参照)、決して「古代印度」のものではない事が最近判った。他の資料に就ても標本台帳の表題をそのまま鵜呑みにしてはならないと戒めている。

標本の表題が示す「さらさ」とは木綿地や絹地を染めた布の一つであることは既によく知られている。「さらさ」の語源には諸説があるが、ポルトガル語の saraça サラシャに由来するとも、インド西海岸のスラット地方で良質ものを産出していたのでその名が付けられたともいわれている。日本では更紗、皿紗とも書き表され、或いは中国風に華布もしくは印華布、またはシャム(タイランド)から輸入されたことに因んで沙室(シャム口)とも表されていた。本場はなんと言ってもインドであり、木綿地に嚙脂、藍、緑等で花模様を描いたものが多く、古いものは書き更紗に木版のプリントを併用したものが多く、後には銅版を用いて量産されたものが現れる。金泥で描き、或いは漆等を用いてそれに金銀粉をかけたような豪華なものまで作られた。インド更紗に次いで有名なのはジャワ更紗である。これは「蠟纈」に近い。

ペルシャやタイにもインドの技術が伝えられ、その地で更紗は発展した。ペルシャのものは絹地にプリントした絹更紗が多い。日本では室町時代末期から南蛮船がもたらしたその多彩な絵模様染が当時珍鳥の的になり、技術的にはのちの友禅染の発達に多に寄与したと言う。我々の資料のうち、嘉永6(1853)年から安政5(1858)年にかけての裂地見本帳8件31冊「和蘭陀輸入品 古裂地見本帳(AN.71)」、嘉永2(1849)年から万延元(1860)年にかけての裂地見本帳で、反物目利十一代篠塚犀次郎が作成した19冊「和蘭陀輸入品 紅毛船端物切本帳(AN.90)」にも羅紗、呉羅服連、金巾、毛氈、海黄、へるへとれん、寿多めん、婦羅多、天鷲絨、テレフ、縹子等の反物類に交じって絵更紗の見本も見ることが出来る。そこに見る絵更紗は固よりオランダからの輸入品ではありえず、紅毛船がインドやジャワ等諸国の港で積み込んだものであったと想像されるが、それらに就ては詳らかではなく、後の詳細な調査に俟ち度い。

話を「古代印度更紗(白[木綿]地に大柄草花紋散し)」に戻そう。浅学非才の身故、それが紋様として確立されたものと早合点していた筆者はすぐさま資料の図像的印象から「ペーズリー紋様」なる語を思い起こしてしまった。物の書籍を繙いて確かめてみると、精巧な色彩で細かい紋様を表した柔らかい毛織物、英国スコットランドのグラスゴー南西約4kmにある小さな町ペーズリーPeisleyで19世紀初頭より当時ヨーロッパで人気のあったインドのカシミア風ショールの模造品が生産され、多くの場合それが勾玉形に先端が細く屈曲した植物紋様をあしらっていたので、ペーズリーの名がカシミア風ショールの代名詞として通用するようになり、カシミア・ショールに最も多い勾玉形の植物紋様をペーズリーと呼ぶようになったことが判った。然程の誤解でもなかったが、それが町の名前に由来していたなどとは思ってもよらなかった。この植物紋様はインド及びイラン、即ちペ

ルシャの染織紋様に多いのは言うまでもなく、加えて我々にも親しく、今もって刺繍、更紗やその他繊維品に広く活用されている様は承知している。この植物紋様の起源はと言うと一般には、西アジア古くから伝わる「生命の樹木」に求められるのだそう。

ところで日本でもそうであるが、幸福を招き寄せる紋様、邪悪な兆しを追い払う呪文的標徴は沢山ある。後者は此処では措くが、前者に就ては龍、鶴、亀、鳳凰、五穀、松竹梅、菊、牡丹、熨斗、巴、花鳥、星晨等何れも我が国で独自の展開を果たした豊かな装飾世界を有しているのである。富、喜や寿と言った文字世界も当然ながら目出たさを表現する装飾紋様として扱われる「吉祥文」として遇されている。夢と希望の象徴、その紋様に目を凝らすと、どこからどこへ繋がってゆくのか途方に暮れる程に見えざる生命力を象る高貴でさえる紋様、生命力の意地の願望を託された紋様

は多いに吉祥に相応しい。そう、唐草紋様である。唐草模様の大風呂敷に法螺貝を包んで、などは笑い草でしかないのである。唐草模様の起源に就ては諸説あるが、ともあれ草に絡(から=唐)んだ型に因む等、草花紋が唐から渡ってきた事をおおせて面白い。その起源は地中海方面に求められ、シルク・ロードを通して日本に伝えられたとの事である。葡萄、牡丹、竜胆、鉄線、菊等、その紋様の素材となったものは多様である。蕎麦猪口によく見かける蛸唐草だつてある。そして既に触れた処ではあるが、西アジアに古くから伝わる「生命の樹木」を起源にする勾玉形に先端が屈曲した植物紋様としてのペーズリーが生命力の持続を祈願する唐草紋様に絡まない全く別種の紋様である筈が無い、と考えるのは筆者だけだろうか。

先にカシミア・ショールを話題にした。もうカシミアに就ては触れないが、文化人類学者クロード・レヴィ=ストロースの夫人であるモニーク・レヴィ=ストロースが Cachemire と題する書物を1986年に著している。手許にそれがあってパラパラ捲っていると「古代印度更紗(白[木綿]地に大柄草花紋散し)」(AN.31)に近いあのペーズリー

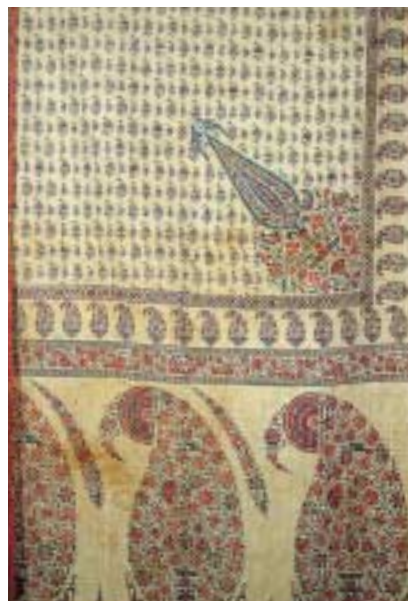
一が飛び込んできた。図版の装飾紋様に関するイタリア語による解説文(勿論本文もイタリア語)中に La palme si suddivide: contiene una palme piú piccola che a sua volta ne racchiude una terza, come le bambola russe. を見出した。「この棕櫚紋は更に分割され、大きな方の1/3程度の小さな棕櫚紋を包み込んでいる。恰かもロシアの玩具マトリョーシユカの如くに。」まさに拙訳の極みである。そう!棕櫚紋である。棕櫚紋の吉祥の意味も

割愛するが、読者諸氏に就ては容易に想像されるものと思う。その書物に矢張り同書に「ペルシャ更紗敷布(赤地に小柄の草花模様)」(AN.29)に似た図版が紹介されているのである。我々の資料に即して言えば、これは冒頭のAN.31に較べて圧倒的に高価である。谷口治三郎より1912年11月13日購入、購入価格は550円。「昭和七(1932)年三月十七日 東京美術学校教授 岡田三郎

助氏 鑑定 ペルシャ更紗 最高品」なる備忘が残されている。この稿を「更紗」で始めたのだから更紗で締め括ろう。資料の中に「書更紗手鑑(外国品)」(AN.86)があって、これまた破格に高価な資料である。1917年10月19日、長田喜多郎より購入、受け入れ。購入価格はなんと760円であった。上と同じように「…稀代珍品」との鑑定が賦されているのである。本格的な「ペーズリー」が飛び込んでこないが故に、懼らくはインドかジャワで作られたと思われる更紗177裂を貼り込んだ手鑑を岡田が松ヶ崎で掌玩している様が目に浮かぶのである。岡田三郎助と言えは有名な画家であるが、何と言っても我々にとっては1909年に制作されたポスター「三越呉服店」(AN.5203-1)の作家なのである。

ところで標本表題にみる「古代」或いはAN.71の標題によむ「古」とは何時の事を指しているのか、このように表記する慣わしが何時頃からのものであったのか、判らないのである。なお過日刊行した「1902年の好奇心」中、図版40の標題はAN.31のそれで、正しくは「ペルシャ更紗敷布」(AN.29)である。お詫びして訂正します。

(美術工芸資料館教授 竹内次男; 2006.06.01.)



AN.31-1/2: 2,920 × 1,375 m/m. (部分)



AN.31-1/2: 2,825 × 1,335 m/m. (部分)
制作年を示すペルシャ語の数字が認められるが、目下の処解読しえない。



AN.29: 3,150 × 1,030 m/m. (部分)